



「あいさつとレジリエンス」

学校教育課 課長 田 中 弘 樹

人前であいさつする機会が増えました。

話すことがそれほど得意ではないのですが、伝えるべきこと、知っておいてほしいこともある以上、数をこなし、力を付けていく他はないと観念しています。振り返ると、知らない方が多い場の方が話しやすく、知っている方が多くおられる場の方が案外緊張します。「ちょっと良い恰好したい」という煩惱が見え隠れする一方、「失敗したら、おかしいことを言ったら恥ずかしい」という気持ちがあることも確かです。思えば、年を重ねるごとに、「失敗できない」という感情が高まっています。それはそれで、年相応の自分ではないという刺激ではあるのですが、若い頃に比べ、失敗に対するネガティブ感情が大きくなっています。

今年度から施行している「第4期栗東市教育振興基本計画」においては、「レジリエンスを高める」を基本コンセプトとしています。教育長から「失敗できる子を育てる」と言葉をいただいている中、失敗を恐れる自分自身を鍛えなければ、と自省しています。

「子どもが失敗できる環境」と考えてみたとき、頭に思い浮かんだのは、幼少期に補助輪なしの自転車の練習をした頃の映像でした。自転車の後ろを押さえてもらいながら、「絶対持つといてな」と、よろよろ走り出した瞬間、怖さもあれ、大きな安心感があったのを思い出します。自分自身の中にある「自

転車に乗れるようになりたい」という前向きな感情（個人内要因）と、それを支えてくれる周囲のサポート（環境要因）があったからこそ生まれた感情ではなかったかと思えます。

そう考えれば、レジリエンスの育成にあたっては、周囲とのつながりを強くすることが、重要な要因の一つであると考えられます。学級経営において、子どもたち同士をつなぐこと、助けてもらった経験を積ませることは、個人の成長を促す意味でも大切なことであると言えます。

個人内要因を高めるにあたっては、法政大学の渡辺弥生先生が、「心の4つの筋肉のトレーニング」を述べておられます。

- ・I am（自分は〇〇だ） 自分を肯定する
- ・I can（自分是可以る） 自己効力感をもつ
- ・I like（自分は〇〇が好き） 前向きさ
- ・I have（自分には〇〇がある） 支えの認識

これらを常日頃から意識させることで、子どもたちが持っている良いものを見える化することができ、ポジティブ視点を強調できるというものです。

それらに加え、教師からの「きっといつかできる」という温かな愛情があれば、子どもたちはきっと安心して挑戦できると思います。

9月になりました。私も失敗を恐れず頑張ろうと思います。I have a lot of support !



「心のこもった保育教育を」

幼児課 参事 辰 巳 文 子

5月に市内園の5歳児公開保育に参加しました。晴天の下、待ってましたとばかりに園庭に駆け出し、遊びを始める子どもたち。砂場の横の小さな土山では「ぬるぬるする。」「すべるでー。」と思ったことを言葉に出しながら遊んでいました。地域の方のご厚意で貸していただいている畑で遊ぶ機会があり、あまりに喜んで遊ぶ子どもの姿を見て「園外に出なくても身近に触れることができた」と考え職員みんなで畑から土を運んできたとのこと。みんなの思いが詰まった土山で、子どもも保育者も泥んこになって歓声をあげて遊ぶ姿を見て、私まで開放感あふれる気持ちになりました。

6月には市外の子ども園の4、5歳児公開保育に参加しました。たらいに入れた水を数人で一緒に持って運んだり、樋に水を流そうと、樋の下にバケツや箱を置いてあれこれ試したり。最初は足が濡れるのが嫌でテラスで見ていた子が、友だちに「こっち持って。」「水入れて。」と誘われて笑顔で遊び始めた姿が印象的でした。ある4歳児は針金に毛糸を巻いた輪で大きなシャボン玉を作っていました。成功しない時の方が多いのですが、「大きなシャボン玉を作りたい」という一心で繰り返して、「できた」を体感し会得していく姿はまさに「主体的」でした。私が保育者としてこの場にいたら「ああしたら」「こうしたら」と大人として知っているポイントを先に伝えてしまいそうでしたが、そうではない見守りをしている担任の先生がすばらしかったです。

この日は「違いを認める」というテーマの公開保育でした。協議の中で講師が最初に「自分は（離れたところにある）フェンスの穴にペットボトルを差し込んでいた子を見ていました。見ていた人いますか?」と言われました。私は気付い

ていませんでした。「大人が考えた計画の中の遊びに子どもは収まっていっているの?」「保育者は『ここ（計画）にない遊びを見つけてやってね。』と子どもに言えるぐらいでないか。」という講師の言葉が心に残っています。さらに講師は「同じような遊びをしてもみんな違う。その子なりの感じ方、考え方、生き方がある。そういう子ども同士がぶつかって支え合って生きている。それが保育の場ではないか。」と言われ、「そつない保育になっていないか?」と投げかけてくださいました。この言葉を心に刻んで保育をしたいと思いました。

7月は、市内園の5歳児公開保育に参加しました。猛暑の中でも職員が遊びの場や保育内容を工夫し、子どもたちが戸外でも室内でも充実した毎日を過ごしていることがわかりました。参加された小学校の先生との協議もありました。職員同士が保育や授業の実際を見合い、保育や授業への思いを出し合ったり違い等についても語り合ったりすることが、子どもたちにとって安心できる就学と楽しい学校生活につながるのだと感じました。

子どもを取り巻く社会は目まぐるしく変化しますが、どのような時も保育の質を大事にしたいと思っています。公開保育で出会った子どもの姿から、たくさんの学びの芽を見つけることができました。毎日の一瞬一瞬の子どもの姿をいかに丁寧に見取るかが保育の質の向上につながっていると思っています。子どもと一緒に喜怒哀楽を共にしながら遊び、子どものつもりに気づき、子どもの心もちに寄り添う。このような保育の基本姿勢を忘れず、心のこもった就学前保育教育を皆で続けていくことで、「生涯の育ちの根っこ」をしっかり肥やしていきたいと思っています。



図書館司書より先生にすすめたい一冊

『アンドルーのひみつきち』

ドリス・バーン／文・絵 岩波書店

ものづくりが大好きなアンドルー。工夫をこらしていろいろなものをつくるけれど、家族には、じゃまにされてばかり。そこでひみつきちをつくろうと家を出る。森をぬけてたどり着いた原っぱで、ひみつきちをつくっていたら、同じような境遇の子どもたちが次々とやってきて…。好きなことを思いっきりできる喜びを思い出させてくれる絵本です。

《図書館 服部千尋》



『なりたいわたし』

村上しいこ／作 フレーベル館

友達に、学童クラブをやめると言われた。その理由が、将来の夢を叶えるために習い事を始めるからだを知った千愛。夢について考えたこともなく、いつも人に合わせて行動していた千愛は、なりたい自分とは何か、自問を繰り返し、徐々に答えを見つけていく。

自分を変えようと悩み、時には人と衝突しながらも、懸命に理想へと近づいていく主人公の姿に勇気をもらえる物語です。

《図書館 小島美紅》

『ムラブリ 文字も暦も持たない狩猟採集民から言語学者が教わったこと』

伊藤雄馬／著 集英社インターナショナル

タイやラオスの山奥に住む少数民族・ムラブリを調査する言語学者が綴るノンフィクション。ムラブリの生き方は、互いに干渉せず、その人次第。個人の生きる力を尊重し、意見が異なっても押し付けたりしない。彼らの生き方から、様々な価値観を持つ他者との関わり方について考えさせられた。

《図書館 南川香乃》



『山中教授、同級生の小児脳科学者と子育てを語る』

山中伸弥 成田奈緒子／著 講談社

“山中君” “奈緒ちゃん” と呼び合う、神戸大学医学部の同級生だった二人の対談。子育てに正解はないとしながらも、研究や経験から子育てについて大切に思う事について語っている。お二人ともにそれぞれ、成長過程で悩んだり躓いたりされている話を聞かせてもらって、みんなそうして成長するのだなと少しほっとした。

《図書館 森本あつ子》



『一人一人を大切にした保育を ～心動かし いきいきと遊ぶ 大西っ子をめざして～』

大宝西保育園

本園は、一人一人を大切にした保育＝人権保育を基盤にした保育に取り組んでいます。それを実現していくために、子どもの思いや願いを受け止めることを大事にした保育のあり方を模索し、保育者間で共有しながら保育実践に努めています。また、「子どもも保育者も一緒に楽しむ」をモットーにしながら、「保育者の思い込みや決めつけて物事をすすめようとしていないだろうか」「これってどうだろう」「こんな風にしていくといいかも」等、保育者間で語り合うことを大事に毎日の積み重ねを築いていくようにしています。このことが子どもの育ちにつながっていくと考えています。



また、『人と人の関わり』を通して、子ども達が心を動かし、いきいきと遊ぶ力の土台づくりをめざしています。園・家庭・地域がつながり、本園を取り巻く環境の温かさを肌で感じながら、子どものことを真ん中

にした保育に取り組んでいるところです。十里まちづくりの理念から『自分が好き』『友達が好き』『家族が好き』『地域が好き』の保育構想図を軸にして、人を大切に想う気持ちを育てていくとともに、子ども一人一人の姿や興味を丁寧に見取り、保育の再構成をしていきたいと考えています。

今後も子どもの『やってみたい』を実現し、子どもがいきいきと遊ぶ姿等々、子どもの丸ごとを受け止め、家庭や地域へ発信しながら、共に育ち合える園づくりをしていきたいです。



『子どもを真ん中においた教育～3つの研究を通して育む力～』 治田東小学校

本校では、滋賀県教育委員会の2つの推進事業において研究指定校となり、校内研究と合わせて3つの柱で子どもたちの育ちを支えています。

(1)「学びに向かう力推進事業」では、5歳児から小学校1年生の“架け橋期”

に注目し、園と学校の接続を通じて、しなやかな心と粘り強さを育む子どもを目指しています。加配教員がこども園に出向いて日常的な連携を図るとともに、夏季休業中には教職員が保育を体験し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を意識しながら保育の理解を深め、全学年の系統的な学びにつなげる視点を共有しました。

(2)「読み解く力の育成推進事業」では、加配教員を中心に、自分の思いや

考えを言葉で伝える楽しさと、伝わる喜びを感じられる授業づくりに取り組んでいます。子どもたちは、書くことを通して考えを整理し、友だちに伝える経験を重ねながら、表現する力を育てています。

(3) 校内研究では、学級会を通して学級力の向上を図り、子ども同士が気持ち

を推しはかる力の育成をめざしています。今年度はどの学級も学級会の回数を重ねる中で、合意形成の過程に焦点を当て、互いの意見を尊重しながら話し合う力を育てることに力を入れています。

これら3つの研究は、子どもたちの「伝える力」「つながる力」「学びに向かう力」を育むという共通の目的のもとに連動し、学校全体で子どもを真ん中においた教育を進める土台となっています。

